

建土研 正員 山口 高志

〃 正員 〇松原 重昭

〃 山口 和子

1. はじめに

都市河川の必要条件が、洪水の安全流下機能とするならば、その十分条件は、市民の「いこいの場」としての機能を含んだ平時機能（洪水時以外の河川機能）であろう。これらの機能を、都市河川をとりまく環境—即ち、都市化した流域、下水道や地下水の低下による河川流量の減少、木質や底質の悪化、市街地での事業の困難等—の中で、いかに実現するのかというのが、都市河川計画であろう。

洪水の安全流下については、ここ数年、精力的に研究が進められている。しかし、平時機能や、将来の都市河川をとりまく環境、あるいは、都市河川の理想像等に関する研究は、やっと緒についたばかりである。

平時機能のうち「市民のいこいの場」としての機能に関する問題としては、下記のようなものがある。

1. 河川に期待されている「いこいの場」としての機能とはどんなものであり、どう評価されるべきなのか
2. 河川をとりまく環境の変化により、それらの機能は、どのように変化して行くのか
3. そのような機能を増進するための手段には、どのようなものがあり、その効果はどの程度なのか

以上の問題のうち、2,3については、流域の水文、河川水質、生態系等に関する調査研究により明らかにして行かなければならないが、1については、市民等を対象に意識調査によるべきであろう。

本論は、意識調査により、いこいの場としての都市河川の平時機能の中身を調査するとともに、それらの意識内容の個人属性による変化の有無を明らかにしたものである。小規模な調査であったが、都市河川の将来像を描くためと、今後のこの種の調査の実施等について、いくつかの貴重なデータを得ることができた。

2. 調査の概要

調査は、東京都杉並区の図-1に示してある区域（ほぼ善福寺川流域に一致）を調査区域とした。その理由は、

1. 東京西部の典型的な台地河川の一つであり、全流域がほぼ完全に都市化され、下水道も整備され、将来の都市河川の一つのタイプと考えられること。
2. 上流側（図-2-A）が改修済であり、下流側（図-2-B）とは全く異なった断面を成しており、現在下流側を改修するために、各種の調査が行なわれていること。

等である。

調査については、表-1に示すとおりである。

なお、本調査の前に、調査項目の検討と、調査員の訓練、調査態勢の把握の為に、図-1に示す和田一、三、丁目の50世帯を対象に予備調査を行った。実査は、これといったトラブルもなく無事終了したが、3月後半の調査であったため、学校の休みを利用した帰省や、転居等により、有効回収率は76%にとどまった。

3. 調査結果について

図-3に、意識調査の結果の一部を示す。これらから、河川の平時機能について以下のようなことが読取れる。



図-1 調査対象区域

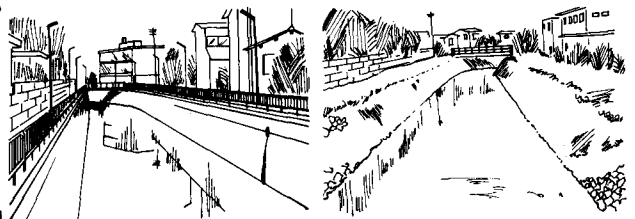


図-2-A

図-2-B

1. 「川の魅力」といった一般の河川に対するイメージは、河川の自然(動物、植物、流れ、景色等)が、9割を占めている。

2. 「最も楽しかった川遊びは」に対しては、川での水泳、魚とり、魚つり、水遊びといった、直接川に親れて遊んだことが強い印象を与えているようである。また、その年齢は15才以下が7割を占め、この世代に対して、川は重要な遊び場のだろう。

3. 7割の人が、コンクリートの直の断面よりは、のりのついた石積み断面の方を好むとしている。しかし改修については、直の断面(図-2-A)に、という人が2割強あったことは注目すべきである。

4. 河川にふたをってしまうことについては、A,Bどちらを好むか質問に、ふたをすることによる洪水時の危険性を加えたためか、全面的なふたかけには、反対する声は圧倒的であった。

5. 善福寺池の保存については、なんとか池として残したいという人が9割以上あった。

表-1 調査の概要

調査対象	昭.48.3.1 現在 満10才以上全員 475人
調査方法	留め置き法
抽出	住民基本台帳より1/250の等間隔個人抽出
調査項目	個人属性 性別、年齢、職業、居住地、居住年数、洪水経験 現在の遊び状況 最近(1年内)の川遊び、公園や善福寺池公園での遊び、善福寺川についての関心度 河川についての意識 川の魅力、最も楽しかった川遊び、改修断面、河川のふたかけ、善福寺池
調査期間	昭.48.3.1 ~ 昭.48.3.31

川の動物	川の植物	広さ	川の流れ	川の景色	公園その他
18.3	19.0	7.1	22.4	20.3	9.7
ボート	魚つり	魚とり	採集	散歩	水泳
17.8	21.1	3.5	9.1	27.3	23
～10才未満		～15		～20	～30 30才以上
22.3		30.0		10.4	22 10.1
Aが好き		Bが好き		どちらとも好きない	
5.7		70.1		24.2	
Aのように		Bのように		もっと広く	
23.3		38.9		33.8	
ふたをきる		ふたをしない		部分的にふたをする	
12.6		54.6		30.8	
埋立		池として残す		その他	
		99.3			

図-3 調査結果

次に、意識内容が、個人属性や、個人の現在の遊びの状況との相関の有無を、 χ^2 検定による項目間の独立性の検定と、比率による項目間の有意差の有無の検定を行った結果は以下の如くである(両検定とも危険率は5%)。

1. 「川の魅力」については、非常に独断性が強く、わずかに、比率の検定において、職業について有意差有と判定された。

2. 「川の断面」については、個人属性との相関が強く、どちらかの検定で有意差有と判定された項目は、性別、年齢、職業、居住ゾーン、洪水経験、図-2-A,Bのような川を見たことがあるかないか、といった項目であった。ただし、現在の個人が、川や、公園へ遊びに行く状況に関する項目との相関は認められなかった。

3. 「池の将来」についても、個人属性との相関が認められ、性別、年齢、職業、居住ゾーンといった項目について有意差有と判定された。

3. 考察

1. 調査の結果から、「河川の魅力は、河川の自然と、その自然とたわみあふれる行為の中にある」と言えそうである。もちろん、現在まで、洪水敷を整備した公園などが少なかったことも原因の一つでもあろう。しかし、今回の結果から判断すると、単なる公園化は、河川の魅力を生かし切ったものとは言えないだろう。

2. 改修断面として、図-2-Aを支持した人が2割近くいることから見て、平常時の機能の向上のために、貴重な土地を使うことは、かなり難しいと思われる。特に、そのために立退きをせまられる人にとっては、なほさらであろう。それ故、条件の恵まれた河川、あるいは区画を大事にして行くことが、次善であろう。

3. 池については、大多数の人が、その存続を支持していることから、遊水池を利用した、池公園などは、公園としても大いに有望である。

4. おわりに

今回は、初めての試みでもあり、ラフな調査であったが、今後の都市河川計画の為には、大いに役立つものと思う。最後に本調査に協力頂いた、研究室の諸氏、調査員の方々、杉並区の皆様へ感謝の意を表します。